



喫茶指掌編

月之部

上



7多9  
628



門多  
號 628  
卷 1-3



喫茶指掌編序  
夫茶禮之行。本邦既久矣。  
蓋其為事。素金殿玉樓之翫  
也。當室町氏之時。真能者於  
人事之交接。欲令賤者有  
禮且信。關草菴一體之茶式。  
以與諸珠光者。爾來自王公。



至於唐人。相交接以茶禮焉。然及後世。茶無尊卑之說。雜然起矣。故令貴居賤。賤居貴。專淫禪意。是以茶道不立。而行茶式者。豈曰之禮。曰之道乎。故志學者。誹謗茶式。不爲者。嗟其有以乎。吾速水宗

達翁。傑起于天朋之間。大有憾此。因邇洄茶禮之源。究其本根。乃本經傳。而興茶道焉。其行也。以禮。其交也。以義。所謂以義制事。以禮制心者矣。與尋常喫茶流。玩器喪志者。大異矣。於是竟立茶衙一家。

竊古來未發之點法。順禮而  
教諭茶道。誠若於聖夫子  
之諸弟子。仁之答問焉。於此  
余游于其門。受茶式之祕奧。  
有年干此矣。因以爲茶癖。而  
翁之著述許多。是書也。信意  
錄之。唯反故草稿耳。頃令嗣

宗擘子。摘部分類。更考訂之。  
以爲九冊。乃謀鑄梓。余固同  
志。遭是盛舉。不堪箝口。聊述  
拙辭。敢書卷端云。  
文政壬午春三月

鳩嶺片岡仁賢謹識

お母さま持重御存  
名又孝くく業事いふ  
さまあつかうくんさん  
揚一つさすいさ  
く反古のいさ

目上

157日

宗平子跡持合勝更老信立



子なきをばはるちくもる  
花とちき路う九つおきと  
かゆ〜世志あしよ理月  
二世ふのふ流ういつらて梓  
糸ちち代えく学。杉中や

うきと海〜く思を結れと  
又。い〜い〜い〜い〜い〜  
ふゆ〜い〜い〜い〜い〜い〜  
月とふ〜い〜い〜い〜い〜  
を信ち〜い〜い〜い〜い〜

ありしより十と誓ふる如く  
 東きれ 是ら果未わらざる  
 かゝいよこそめせよを同志の  
 をあつらふらめらるるそのちと  
 是るは事と寸大に おのれを

何ぞ疎ち給ふとまをぬく者  
 幸すくあまの天子はけを  
 たへし給くと祿ふのここ  
 又取七計し 兼月宗輝  
 上つるあといしやわしめ

ちん松



Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page.

樂茶指掌編卷第一目錄

豊后殿下室の焼酎を宗室御成の事

説

跡見の茶の濃弱と云事

りて録の類

外言録の説

正月七日の茶の事

正月十七日の茶の事

东山園詩の別荘にて感をもて茶の事

説

正月十三日の茶の事

津田宗吸の茶の事

或人の説



或人の説を評

或人の附言を評

或人の説を評

今井津田と混叙の説

吾我月上旬の事

雷の或説智宗旦の事

吾我利休紹智の事

細川三齋道安の事

藤村庸軒宗旦の事

吾我或説或説の事

或人の附言

或人の説

説

説

説

説

説

典長殿利休の事

或人の説を評

或人の説を評

室石頼良の説

或人の説

紹隆利休の事

宗旦蘭社の事

白琉球の事

織田貞置丸茂の事

細川之母の事

或人の説

或人の説

評

或人の説を評

附言

説

説

浪華の医師宗平茶の茶の事

説

或人の難茶

古田織部口切の茶の事

宗貞日野肩衝茶の事

正安寺宗旦一橋の茶の事

説

奥村何茶枝の茶の事

或人の難茶

其長政茶利は茶の事

説

深く茶嗜の事

或人の茶の事

六月七日起りの事

花守の茶の事

六月十日正午茶の事

或人の難茶

豊后大仙院茶の事

或人の附言

説

利休系橋の茶の事

説

或人の茶の事

或人の説

或人の説

附言

或人の説

或人の茶の事

利休二重切の糸の説

古田織物人の花を説く事

小笠敷の赤き糸を説く事

沼路池の坊主花を説く事

池の坊主の事

江月和尚遠く花を説く事

細川之裔糸入る説の事

或く糸の事と恥を説く事

美人投花の説

利休投糸の趣を説く事

説

説

説

説

説

説

説

説

説

説

行相船越糸の花の事

冬の糸は糸の事を説く事

高田宗理或人の花を説く事

口切花糸入る事

利休指額の花を説く事

錢別糸の事と指額を説く事

或く糸を説く事

細川之母投花の説

珠光牡丹を説く事

利休生糸の事と牡丹を説く事

説

説

説

説

説

説

説

説

説

説

古田織於牡丹を入る事

説

或人その子梅蓮の花入事

説

利休を龍谷の茶を入る事

説

或人連麴を入る事

説

又其有紅葉を入る事

説

花の説

二ヶ条

説

樂茶指掌編卷第一

平安 連休宗道著

男 宗嶺授訂

曲豆尺殿下聚樂の事、また時香濃をれ、利休はの終て香の  
 香は茶の湯をき、修する人の清きありにきて、上立賣の  
 針茶宗喜しやれ、あつんとりよ、はる、今より直は清成可  
 るとして、利休を石は、まゝる、茶者定、清成有、茶を大は、や  
 て、茶席の事、清新、茶之室、上立、茶を清、清して、洗茶を、或  
 く、抽出、清口、物、茶、引、扱、持、入、湯、を、清、新、茶、を、入、炭、車、

て淋を待て清茶をうりて人殿下思ふふあり故大に清  
感をもて善く己我を神とてかき清戯との如しそ有る  
神の利生と福をうりて人として清知りを下し給ふと人  
又或る家を煖火をてりて庭の書を枝所へて  
清戯ありと出たり

又世覺集より縁にて遠事を出し故に云

或るの計を宗を細川之商利休と茶にて約束にて路地  
の内なる未済し深うりて折言を吉公衆ありて清戯  
てし前を清通りて茶清樂を唱れ此類ありて清為有  
らば宗を志くしつゝのりてをりて六世に約言と為成清茶法

不空のりて清をうりて茶清之室に清茶製斗を添て  
なり炭を直りて釜持入新水に清し清茶をうりて依て清  
と兼る不斜油家を神とてなりて清戯よてた有る神の  
利生と技持をうりて人として技持を給ふとち人を始公と  
し清茶の美味い小茶碗にて早速の焼くありて依て美味  
飲人の茶は是れなり

行て流るるに瓶の大振流りて磨斗に多ての有り奇  
異の焼く清戯ありと云

たし可有ふ取教なり瓶向古昔魯之哀公孔子をとり  
時の類を以て身なりと云或る有茶清ふ時の茶の最奇

の形にちる事、は拍只に編んで還流布りと見ゆ  
 其及の命と云ふも子葉いふも止しめたる殿下の縁を  
 流すも其甲斐有と云ふ又利休も亦斗執向を流すも美  
 稱して人又嗜愛集の縁いふか遠くも大抵は日報  
 也毒味跡見の事、利休百富又豊茶茶是の  
 天正十五年八月十七日、始り翌正月廿四日、徳宗、  
 業も聚楽浄新成の後の縁を流す  
 天正十五年の  
 次ちる一、年月を不著いふ事、いふ分又毒味の事、いふ  
 事、いふ沙汰いふ事、何れも人、いふ事、いふ事、いふ事、  
 事、也、時の業、特、宗、通、も、いふ事、いふ事、いふ事、  
 事、也、時の業、特、宗、通、も、いふ事、いふ事、いふ事、

時は高次の執向見まふ、思ふ、嗜愛、いふ事、の、後、何れ  
 の、思ふ、事、也、  
 文化元年正月七日、信長、業、通、も、いふ事、いふ事、  
 言、渡、横、て、掲、目、も、いふ事、いふ事、いふ事、  
 の、事、也、  
 らく、も、いふ事、いふ事、いふ事、  
 小、酒、を、流、して、も、いふ事、いふ事、  
 七、草、の、事、也、  
 ま、よ、新、口、も、いふ事、  
 掛、物、いふ事、  
 掛、物、いふ事、  
 掛、物、いふ事、



の事と思ふに新玉つれも善き人清く好むに致し  
第5人と後續をすは出づる流古も致しよを嘆の如  
梅も一枝折るも取ら敷入人と思ふはふく叶花骨  
たふれいめ何うなるや梅も風に付て古竹の音折  
ありいひ切く漸素骨とち一つれを掛る訂言をぬ  
何くくつめぬと梅も折る七葉の小思おきあはよハ  
何をも成終るやと百は花骨の訂言の事よとる取は  
一以や筆を焚てぬ終一と云ふお花も笑て真つ顔の  
る子は静れて流涙を流るやと云ふくはちせく連  
小穴ぬぬ紙索して懸流とけり其れ梅花をたく

ふ斗客も一人の葉とたうぬ落葉は暮子うらも  
てはてし無き料取取寄等取て去月十八の夜も  
ほろろはせる歌人十人うと結りたりかくてふ斗  
せらる一人の葉とぬとてこのて  
身ははぬぬ人のつとくもやんそめく梅の音はむふ  
ちく雪形ちりてまよふあまの殿一行の顔も打たぬ  
更其は流る商のほ留まはく有るたみいとしては次  
て料減をきて  
一ちふくは更清おやのけりしやいふくか致る  
侍従てうらみのいはよをもとけり人









一掃し流して於華語不盡時流は丑の刻をうらと云ふ以てを  
頻よふか核を風情ふ斜依利休之世名の舞に乗て只今の法を  
この有ふと云ふ之舞之末東涼くは響又合うはとの利休休云々  
平の舞は響うつれい宗吸しん入る有る此れおき人と進んだ  
まはり人と法儀もそこにてお出掛あり何れ此の成速中  
の風情一入臨まよあゆませ給ふ言涼くは利休出たり言々  
家鳩に乗るはつて之舞は慰ちうらおたりと利休の響を多免  
宗吸くはねま丁前よりお遊覧を走るを揺るを伺せ給ふり  
鳴く形くとやうくはあくるはあてはもこそとて此の舞  
内有り余り言の面白さう舞に乗て早ういと云ふと云入

るる喜ぶお出待り申すお通う有る者へお入てらんお出  
お流木の段殊傳りう利休之形お任せやう口是はら之舞流  
成んよめを路地中言の趣之舞敷お度日進ては流人あるは  
座は不破の番煙は舞を始る宗吸おて云々の不よく流出  
こてお流つる人喜ぶを取ておをを過るとた有るとて番品を  
取ておねお流いふとお有るに月そとを利休おし舞を流  
一と一様をお出之舞宗吸其の響を留てお流るは舞素  
よりお有名者して有るとは入後振の響を執おるは度直く  
たるお是は言お何くまら有るは流お時お至の流を  
おくくは有る宗吸流を流る響を流る水くまらとち折る有

利休者、子思多をわて、或るは是を中、生雁の葉、如  
少、或、杯、一、文、飲、も、そ、と、れ、り、以、て、空、を、持、入、湯、を、も、り、後  
新水を入持出、杯、掛、り、し、き、り

或、へ、云、お、り、て、飲、の、葉、は、湯、に、相、七、つ、何、ち、り、き、も、持、る、を  
大、法、し、は、も、時、を、沸、き、い、香、の、湯、に、如、ま、た、る、を、も、り、持、り、  
る、半、量、の、こ、り、り、香、の、水、や、人、に、知、る、を、水、に、添、  
と、云、は、せ、し、き、り、ま、り、き、り、し、き、り

此、或、へ、は、葉、の、湯、を、も、り、し、き、り、後、ち、れ、い、ふ、は、  
と、も、何、は、酒、と、人、飲、の、葉、に、七、つ、時、の、あ、り、り、金、を、掛、ち、り  
香、の、水、と、い、ふ、云、え、よ、ま、寅、の、時、に、大、陽、の、光、は、り、て、煮、る、時

かり、い、ふ、物、は、湯、に、向、き、に、流、水、井、を、昔、は、葉、は、い、ふ、葉、を、  
い、ふ、是、は、水、中、に、切、り、き、り、を、煮、る、ち、り、既、に、煮、る、葉、は、も、  
の、時、の、ち、り、を、湯、に、沸、し、供、し、是、を、井、無、水、と、い、ふ、人、は、  
事、も、有、い、れ、七、つ、時、を、煮、る、を、煮、り、し、き、り、沸、湯、を、煮、り、  
其、香、の、湯、と、い、ふ、香、を、大、法、を、い、ふ、何、の、汁、を、い、ふ、  
と、飲、の、湯、の、湯、を、い、ふ、か、や、ま、り、其、湯、に、い、て、味、の、湯、と、い、  
き、り、飲、の、湯、と、い、ふ、湯、の、湯、と、い、は、湯、を、い、  
い、い、唱、也、世、傳、の、湯、と、い、ふ、湯、を、煮、り、し、き、り、  
煮、り、し、て、湯、の、湯、の、湯、と、い、ふ、湯、を、煮、り、し、き、り、  
利、休、は、湯、を、煮、り、し、き、り、湯、を、煮、り、し、き、り、

糸の向の遊鶴と云ふ由又今所遊遊入遊入と云ふは  
葉より始とゆも後鑑と云ふの最第一の葉は何分  
雪の向も始とゆも入淋との深に始と云ふ  
或人の附ては之を初体と云ふ糸の向も初も服は  
かゝる者より初体と云ふを中い雪よ月を始と云ふ  
餘雪中は縁風流るる云と云ふ又服の言まは  
改るると云ふ

實は之と云ふ言まは始と云ふ始と云ふは  
東大寺より始と云ふを及して始と云ふと云ふ手  
利と云ふ又服の言まは始と云ふと云ふは

雪の向の遊鶴と云ふ由又今所遊遊入遊入と云ふは  
葉より始とゆも後鑑と云ふの最第一の葉は何分  
雪の向も始とゆも入淋との深に始と云ふ  
或人の附ては之を初体と云ふ糸の向も初も服は  
かゝる者より初体と云ふを中い雪よ月を始と云ふ  
餘雪中は縁風流るる云と云ふ又服の言まは  
改るると云ふ

河田宗也申分ゆや及吸の事の取次り人今井河田千の  
と申す。信長公は仕て各之を召し取らば、おいておん  
る。おん申にもおん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。

内五六寸積りしおん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。

おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。  
おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。おん申す。

茶の湯書一おきて通つて唐へ入つて唐の向掛を  
えりて一利休のおきのみち

くお初書よといふはあつた事の内し

先は謝辭せし人は又も入つてはつたといふは  
きつておけ先は御つれいこそち御あり位を次は  
ゆるやしのちをきまぬあつた此又の指お別のは御  
の類といひしはまゝいふはあつたかき一或は

古の或は御書よといふは唐へ入つて唐の向掛を  
ゆきよといふは唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
とるは唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を

御書一おきて通つて唐へ入つて唐の向掛を  
て唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
持おるは唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
て唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
向のて唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
茶の湯書一おきて通つて唐へ入つて唐の向掛を  
いふは唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を

は唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
を唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を  
を唐の向掛をゆきよといふは唐の向掛を





たはなるとはなほ綴りありけり  
も計較いふはよしくはくはく  
そはなとてなまの綴りもよき

利休君の露蔭を御より兼て  
兼てまをぬぐとくはくはく  
只よ人を取寄るとはなほ  
の中より出くはくはくはく  
その袖より出くはくはくはく

西洞下下下下下下下下下下  
西洞下下下下下下下下下下

鳴香の香を御より兼て  
たはなとてなまの綴りもよき  
只よ人を取寄るとはなほ  
の中より出くはくはくはく  
その袖より出くはくはくはく





此の人のそのまゝの思ひをむせたる清和のまゝといふ不  
あつた事やぬれぬれ今より後書れぬ事や  
此の人の思ひをそのまゝといふも又の嘆も何れ  
は世の思ひをそのまゝといふも

典了長殿下利休の清和の事や花の事や思ひをそのまゝ  
右清和の事やそのまゝの事や花の事や思ひをそのまゝ  
もたつたれを殿下清和の事や思ひをそのまゝ  
しに事や花の事や思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
またも思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
或人の思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ

よ入て人を向ふは思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
事や花の事や思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
せし利休の物教をそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
又賢なるに思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
て思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝの事や思ひをそのまゝ  
沈作詰寓簡曰宋之哲宗嘗因春日經筵講罷後  
坐一小軒中賜茶自起折一桺程伊川願為說書  
遽起諫曰方春萬物生榮不可無故摧折哲宗色  
不平因擲斧之温公聞之不樂謂門人使人主不

欲親近儒生者正為此等人歎息久之

温公伊川をふ愛ちりと謂ふ有る人其人わつ小  
事より物々愛近ちて儒教をきけり車は道を  
少る事の疏く人を憂て歎息きり一節一節温  
公の如く終儒教をきくよふ程の事ハ能く別ち  
ていふ悔して自ら人をたふすことを愛のすゝめ  
は禁じて程明道を斥くといふ物あるは是れは附  
會の誤ちれり近以柳生宗鑑父子の類はもい  
んる明道父子を宗鑑は以て伊川子を二歳子の術  
をたふされんる宗鑑の誤は父子教は以て宗鑑は

の類ハ殆ど其因り人々ハ伊川子の愛之者の違作亦  
及居或る類の二幅の信の誤りて其の自害する人  
能顧者よ又明道伊川に僅となるをいひ伊川子  
卒の活ありていんる温公の活ありて其の殆ど  
は教を人利休の學ありて其の殆ど温公の類ハ哲  
学の類ありて依て其の學を人必得たり伊川子  
も其の推折するを答給利休の殿下の言はるる  
を以て起して宣放下れ其を居せ給り有教と一  
風流  
評する如きこと其の學を遠く宗性法は也  
よ其のいひしれとも一梅のふあぬをいひて

明道

ちりけり是推抄の情なり

或人の後日書吉の法を重んずる感は、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり

はく、こゝ東の湯の始末を、舞く侍、極、最、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、まふ、一、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、口指、一、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、のく、一、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり

室不類、室よ、利休、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり

是も、口指、一、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり

或人、利休、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり、生年を元一輪掛をのたすも、あしき事なり

鳴子島を渡りてそけ人の家より常平の軍の傳  
ハ聞しそ常平の軍は又も此の唐流の人の言は  
せしそ常平の怪別は作さるる身入しそ若し  
實はつとけ有るも此の事目も常平の清盛の傳  
一編を然し始しそ只そ此の風情せしつるハ  
そ清盛の軍は利休此節を以て習者といへ  
そ常平不鮮を後人の言はしそそ常平の傳は  
し唱る所はつとや各細川と無けしそこの傳を  
新しそは後常平の軍はそ人しそそ此の傳  
うそ節は再後常平の軍はそ人しそそ此の傳

常平はやそ常平の軍はそ人しそそ此の傳  
實はつとけ有るも此の事目も常平の清盛の傳  
一編を然し始しそ只そ此の風情せしつるハ  
そ清盛の軍は利休此節を以て習者といへ  
そ常平不鮮を後人の言はしそそ常平の傳は  
し唱る所はつとや各細川と無けしそこの傳を  
新しそは後常平の軍はそ人しそそ此の傳  
うそ節は再後常平の軍はそ人しそそ此の傳



やうに花のいふは言ふてはてせよやうに是をい  
はれぬ古昔路地よ心本にさ嬌しやまよふは言の録  
まよふに一教の念よいやうに人かれとまよふ現世の  
先の説きをまよふに  
又宗旦の文に

とて一教の言に今とる鹿の蘭花も咲いたるは

二月四日

名判

かゝる文の言をまよふに然とて鹿は依持する振有りや  
鳴年思ふ言て古人の糟粕をよま振をよま此系  
とては始末いふ物有りやあやうにもなれぬやう

免れ有りて真はほりちる人毎年の物向いを受まれば  
文のいふに思ふにまよふに吾源流居の鹿よ兼い松  
花の白琉球の本を植へて月居人の知れやまよふ  
の以ては其のつ人を折つ時の物向いもわつてや  
は流地といふ松をちり改植するも有りてはよまぬ  
このいふにまよふに

織田貞盛翁の於て武願に於ての教をまよふて耐えりつ人も  
いふにけり或時九段一夢にまよふ人の言に松平見休を言つれ  
る言はれは有りて折る言はれは有りて待合に紅梅  
の本有りて花をまよふにちる言はれは有りて見休よ向の言は

月

日



ら〜せ〜ハ、或るもてそ見〜ハ梅花のそ〜をとおも  
か〜を〜して梅年風流は〜を〜と〜の〜と〜商〜に和  
歌のそ〜も〜〜から梅向ハ梅〜は〜は〜有首  
て先進の糟粕ハ、或るが〜の〜は〜は〜は〜  
を〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
習有と〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
体との〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
の上〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
人〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
作〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

ハ梅花ハ、或るもてそ見〜ハ梅花のそ〜をとおも  
か〜を〜して梅年風流は〜を〜と〜の〜と〜商〜に和  
歌のそ〜も〜〜から梅向ハ梅〜は〜は〜は〜有首  
て先進の糟粕ハ、或るが〜の〜は〜は〜は〜  
を〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
習有と〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
体との〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
の上〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
人〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
作〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜

ハ梅花ハ、或るもてそ見〜ハ梅花のそ〜をとおも

八月十二日

判

川端道徳書

宗易

又の文〜

三平半〜一級は、向面と根上作中を、は〜を〜

九。

判

川端道徳書

宗易

川端道徳書

宗易

此家ハ先祖利休の一人ヲ格別尊ぶと云ふれり  
休より始りて其の文ホ多しと云ふ 天正年間ハ  
名高き其の文ホ多しと云ふ 利休の哲智  
にして志も教も是に於て度家あり  
浪華の医師何れ家實たりて教を授けり見ぬ世  
人を友とて 明堂を築き 船を造りて 舟を  
て望水の事意ハ或る事ハ之ハ流華ヲ格別何れ  
の事ハ流華の事ハ彼匠何れと云ふ 船一舟  
何れハ利休の事ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
一と云ふ ぬれ事ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内

行ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
勢有と云ふ 其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
潔よりつる事ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
床ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
船ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
柔ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
かハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
めハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内

堀川院内ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内  
麻の事ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内ハ之ハ其内

をそけりぬと母親の方より人ちりてあると雖も  
もやは世ともよきを承て古昔を指さるのにも  
とらう是を心息に細川と村休より高平の茶の始  
末の事親こそとす

或人此茶を説て云書今政見の茶より云ふに  
茶入を用ひたるは母親の法よりと云ふは  
は負者の一俵一が香気も有る上一節の後を  
ふりやを政見の茶より承て主伝たきまは  
豊臣殿下小田原清陳中の茶より鴨居御の茶入  
にして主のも茶ののきもは前傳田原吸茶より

古田織部は口切の母長考を折時の茶入より承  
はて用ひたるは母の法より何の茶入と云ふは  
親の物より承りたるは有るに付本地の茶採り  
てい曲るは是にての事なり此の別は貞正の  
の法は有るなり

小堀を承り日野有角茶入京大文章を承り貞正  
持の時茶より承りたるは茶入を承り用ひたる  
らねる有るは是にての事なり是にての事  
産は後子の茶を承りたるは是にての事なり  
二つ有茶入より承りたるは是にての事なり

手紙をさるるこの伴ちうきうの一枚の園靴を人れ  
沙汰はなるあちうけや見る人純正で又初生の子と  
入後まきまき物事をつつる類もあつたはる類  
古昔にもあり事にてまけ牧師河内守英成或対凡  
只の葉は初生の花を入るを或人能て之初生を  
入る事め何と答へるを英和にて又いふ初生は  
ちう既生の子の葉は初生あはるるや甘く上  
客はめでたお中居中の物事事をもふかしく思ふはる或  
いふは初生の葉は意易に花又いふ中にはは入る  
花の形もあはるはかゝる花只一通つた思ふはる事

の給ふ事能らるる事は深敷事給ふの類ははる  
れは初生

お居院の正安寺常に宗旦が園屋かろつて庭は好蓮寺  
と云はれ咲出ははる初生を宗旦は種もさうな事  
てなるとも是れ花持ちて之は花連中して落つるは青  
老僧は告げいふ無の事は有人依然に沙汰はる事  
と後これ宗旦も是れ種もさうな事也  
の掛物を取て彼利休は他の園地もと云一市の花を掛て  
こも枝を入て落つる事を下にさして初生を招入て  
茶点して互は無して論ぬ

且その物向風流の爲に人々に能くしては掛り  
奥村の末の庭は如蓮寺と云椿今月初一輪の  
るゆりて寺の口切の葉を物とて故に持来て  
を直り掛るのを取て花雨をては入る葉を  
点茶をちり

或人難して之初無物及花の物来りては  
必有いほ掛物たるに多葉とちりては  
之を理ちりて客をうり相候の花を持来りて  
を成りて初無花雨をせり也及多葉とちり  
必貴氣の厚くは終の考は皆人事たる

豊長殿下大飯銅の水を流して床の中央に置せ侍は紅梅の信  
交の栞を一本置りて之を並に利体を石花を入りて  
侍の人も親の袖を引ぬりては終りては計り  
叫々に利体最て速く紅梅の枝を逆手に取て  
らりては入るに一葉蓄りては流るる流るる  
えりてはぬ風情をそそりては料無を流して  
利体を礎とせりてはぬ奴やの上にて  
称し終りては人侍の人もは利向を称し

大寺一節の御をりて高及登りては  
此大飯銅の銀をちりては

成翁等に榮を嗜癡淫一朽言者の前日召て曰  
君妻や或時さるの意は事なりは終に始ふ分ぬの事  
多かりあらん一くまことを押詰りある苦勞なるは  
おいてま理を直し事方ある樂を得るにあらん有は不  
便の事や終るに候はる人し事あるの事いつてさ事ある  
時ま一候ておく花何しる新能の同との候言にてさ  
の毎日はま言味より理分ぬして一年もさぬはに依  
るも名も始陪從の一人ともさ言ぬぬぬぬぬぬぬ  
少も牢籠するなきい言やしてさらぬ言利力有るに  
押つたよ丈も手柄このあらぬとあまちれれれれれれ同

類の言述述をい今言事を傳へては言はれ  
言らりし言らりし言らりし言らりし言らりし言らりし言  
あらん

ある四月七月の或言方未言言を言て言を言法  
日例の言言法言言言の言言言言言の言言言言  
言の言言言の由にて樂通何言を言言言言言の  
事を言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言  
言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言



持来りては五箇の花筒となり持来りては付し  
の瓶向ふ事ありふたに取あき事の趣は歎きをいふ  
くかふ

五箇の花筒といふ物物その一事切又八切二事切  
之事切し及三箇の瓶一箇尺八切と云ふ切は  
又八切といふ何れを連し一人は切之事切は東園中納  
之墨辰辰千年の友と銘し銘して今もあはれ松  
苑に

六月七日。神事なれは回条の一人何れも一日志の友  
あり事日伴して糸或然るもはあ有ぬ如く花

の無を得た及とては事切花を入しは後  
て相長の時香物ありし事切もあはれ  
事切は本よりいれは口授きし事人の情は事  
あはれこの畧

或は文花事の花筒を信し日儀は實来りてふ時の  
事切は信しぬ事異中ちれは度はにておはれ  
かしく通箱の事にて申起の度は度るの御をたむ  
して事切の事の中央は度厚凡一双を古風の趣に  
事切して事切の大瓶二つ立ては事切は花をふ  
陸投入事切の本槿花一輪を古瓶の瓶取のふ

湯に投て点茶せし事は之を海に投てしやれは  
何れ取ての物向いも流されしやる道宗の物向い  
又面ふも流しありし

六月十日の事の中平年の事をも傳へて宗人せ度い  
ハ多し其の事あり同の候をもつし其の事も  
しりする候に宗人傳へてかかれし物数種と宗人を  
送つたはれて中記の及ぶ箇五箇とあり其の事又  
送れしして宗人は宗人傳へて一箇に投てし  
一箇に投てしとありしと点茶しぬ

煙スル

向日 奴らぬ五切  
抽替ゆけり

日向 桶の汁梳  
飯 いろし  
冷して

了て 雑煮梳  
鯉のこく志中  
テ山椒

日向 桶の汁に  
ササとこ 根菜丸  
大まきとこ かし  
せんめきて

草子ハ 宗人傳へて 飯次 湯たし

宗人傳へての事ありしと存候ありて無しぬ  
或人傳へて飯かゝ温ちれい善とゆえたりしやれ  
宗人傳へての事ありしと存候ありし一節の事と  
孫古事をも傳へしと知

或人の以て長慶下大徳寺の大仙伝一法集の時利休を以  
花はれしもの存ありし事宗の事の上の事ありしとの事

く居るに金のさふの向ふはあつてさふを  
たう時取ての風流一入の清感かゝる人

或人の附言は利体の物敷き何れ程をさふ事  
お何程さふ事かとの程と程さふ事かとの程  
一いつかゝるの程さふ事かとの程さふ事かとの程  
言の程向の活と活地さう若抱馬さう金のさふ  
さふ事かとの程さふ事かとの程さふ事かとの程  
さふ事かとの程さふ事かとの程さふ事かとの程  
さふ事かとの程さふ事かとの程さふ事かとの程  
取人は利体は物向何れさふ事かとの程  
取人は利体は物向何れさふ事かとの程

或喜殿下利は完一筆清本有る一筆廿のさふ  
井の程さふ事かとの程さふ事かとの程  
その申さふ事かとの程さふ事かとの程  
にもさふ事かとの程さふ事かとの程  
儲のさふ事かとの程さふ事かとの程  
さふ事かとの程さふ事かとの程

さふ事かとの程さふ事かとの程  
のさふ事かとの程さふ事かとの程  
てさふ事かとの程さふ事かとの程  
さふ事かとの程さふ事かとの程

能一効は培て為給は標を以て御有必事運の人の僣備  
せしむる却てまふ角を正失はばあはけくすくしむる  
けりし程危し人幸ちて公の嘉説にあはしよ  
不きい何友は吾人せしむる事のこころしむる美と  
も法五より或る事計いあて給を業人彼孫子  
韋曜の教に利休は田原は陸中にて牛のふ角  
を敵とつれは時よふ計まの惜時を思ふ人として  
茲を如事をもる業能かそ業梅の業に際し有是  
し之は世給一思ふ事の利休の業の一やまの事を  
誤めてや角新く唐原なりとて浮世の妙福も信

花の業紅葉の業たしとて秘するに己く家の傳と  
累は程危し是を危をもとく故に予を教てくし  
留めたるは  
或人の此業の趣初望せ及せし教ふかめ何と云  
然るにされしもその時を知らぬは其趣を以て  
くい及の趣を人む初望のゆゑ若し梅を以て  
事とてを著言い以眼をたれん是ははあし此一  
事とて同じ申候なりし趣も既に利休の百書の業  
を照しし人  
或人云一為書目利休晩そる者云せし小中

ちれいけき新しく二重蓋用の小中妻と云ふ事  
 擇儀一々之も又一説と云ふ事  
 或人之彼一重蓋用の小中妻の縁起の事  
 之より更に額縁取本振の清浄と有る事蓋用の本  
 天井の花約の縁起の事其利休の縁起  
 未だありや縁起の縁起の事又云天井の縁  
 起の約を入を懸て系構を入一様構の事  
 と云ふの事此を利休の縁起と云ふ事  
 縁起は人々皆ら舟さるる事や縁起の事  
 元より一節の執向なる事

京小室東陽院の老樹、小中妻と云ふ二重蓋用の  
 有る小中妻大業の縁起の事其利休の縁起  
 一清成有ると云ふ縁起此小中妻の縁起  
 を述べる事元より世に老樹の二重蓋用の大  
 招儀と云ふ本元入掛の形一丈も短くは井  
 の縁起の中程より短く招儀の事其利休の縁起  
 と云ふ事其利休の縁起の事其利休の縁起  
 其利休の縁起の事其利休の縁起の事  
 之を其利休の縁起の事其利休の縁起の事  
 之を其利休の縁起の事其利休の縁起の事

有少約してそのにまとい同体して行くや梅の  
 の名号の更より事始物なりと云ふ中更も更より古  
 風改て面白くけり一本は釘一本もちり年ふり  
 てもちられしを先づにやと斬て終く又作り釘  
 せしちり只掛は土井の首掛の中柱あり九寸許  
 あり釘有のしを思ふ本又のし糸の類かたやと終  
 此後愈の釘より糸梅を入たるは申又床前の枝ふ  
 りと終くしりしは序より利休此糸をれせし  
 云ふはしりし  
 或は梅の枝は遠くの時ち更何糸の糸より

は初生の如き中ほり及入は四角の中の道より其の  
 釘より糸梅の枝を入るはしりしは序より  
 てそのより更をもるる申く是は枝先の針より其  
 けりより終くしりしは序より其の枝より其  
 せりより其の糸梅の枝より其の曲より其の  
 一糸の類より其の凡情面白くしりしは序より利  
 休の作を公武梅の枝より其の更より其の  
 利休の二重の花筒より大梅梅の糸より入るは  
 或は遠く梅の糸を供りて梅梅の数を下より文を  
 川何より其の事より其の糸梅の枝より其の更より

少くも

大根の二葉を眼目と見え物馬をそふに示さしき  
ふも部侯の招ちれはち根の二葉をぬり見え敷又  
たよる有る川の足取計を杜撰の誤をせしむる  
論といまれとておかしき事一適所は言ておれ  
くすまをめりて親回をいさして口より取をたのめ  
るは此道のつれづれ何事とていふは能く  
ふ回を晴し能く又おかしき事といふは  
しといふはふりてかゝる二葉の根の入根の  
かゝるふは根付とてにもふ有る只大根の二葉より止

ちんちん家老流の根一葉物は花二株入るを  
二葉は入るはつとて又おかしき事一葉物二葉切の  
花筒切根は有ると思ふ及世のつれづれは  
よい竹ふの初はれを取ふや又ふあ志流の根  
をぬりては花の生ははて投きしれは  
上の名もに起るやつれ何れなるや又此方の  
二向は葉は有る能く茶のそよ入るは及  
のまはしてつれ花とていふは  
遠くから

古田織部人はふを送るにふは信は蜘蛛の糸ありと

或人視讀を以て織物と見し新装後ちり

田舎の所より赤きをとりてきりて人よふを以て  
日唯の古き送し人のありて或人の視讀を以て  
群と見しといきりて人のありて一や二や  
現るのわれは能くもよ

小室変は赤き花のふりて其花の赤きを其牡丹の紫と  
可入

何人の紫を戒ふ一様の後とのふりて其牡丹の赤  
きふを其花のふりて其牡丹の紫と  
の紫を其花のふりて其牡丹の紫と

花の香に子拍と執向の類よとて能くもよ  
紹隆池の坊をいふとて其花の赤きを其牡丹の紫と  
いふとて其花の赤きを其牡丹の紫と

何事とて又難ていふは其花の赤きを其牡丹の紫と  
の法式を以て其花の赤きを其牡丹の紫と  
其花の赤きを其牡丹の紫と

或時里村昌的といふは其花の赤きを其牡丹の紫と  
の法式を以て其花の赤きを其牡丹の紫と





正倉院の御蔵に珍草をうまき茶のふくろにて  
 久しき昔に家老よりおのりくま信有くおのりかよや  
 更替志の見識をせしむりしきまの茶のまじり  
 ちる年い法後を思ひて又てのたいたいしりり  
 目利に此人にて後々のまじり家老にまじり  
 とまき有るまじりの趣を取てまじり人  
 細川之商売にまじり花を入りし水降のまじりまじり  
 してふを精そらして善法にて見て花入しり入るまじり  
 ち直りし一枝つ入るまじり或は入るまじりいおん  
 てまじりまじりにてまじりまじり

見よ茶のふの趣をまじりまじり  
 の趣考はまじりまじり  
 紹智の継信よりまじりまじり

或人切志教して昔にまじりまじり  
 茶の拾し時珍花を数粒集りし見立まじり  
 細入茶の頭をまじりてまじり  
 花茶とまじりまじり  
 一本目をまじりまじり  
 まじりまじり  
 後まじりまじり

この利休時代の事の一々を記しにしようと思ふに何  
 人共能知らばなりき趣ありしより少し紙張亦有る事  
 ちと云ふ事ありて事なき事なき事なき事なき事なき事  
 西敷人の癖にておはして事なき事なき事なき事なき事  
 華とんと梅の事と計り初る人の事なき事なき事  
 惜しむ

若き人梅とて一の花を入るに五紙を折つて  
 一概の事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事

利休之梅花、鮮く葉ふいふく入る」と

いろね事々、時々、一花、一紙、一葉、  
 に桐石見守船越伊豫吉ぬく清く葉敷上りぬ者も何れも  
 又、葉のふき入る伊豫木瓦の花を入る杖の杖木  
 凡のふいふく、伊豫吉ぬく

瑞光との、いろね、時々、一花、一紙、一葉、  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事

五月の葉、木槿を入る、いろね、  
 事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事



或人柳を折て宮より西に去る柳を以て事作の及ゆは  
柳子をまわしきまきし柳を纏へ木の片端はまきし

てい原氏文毅の古更に伝来しと云ふあり

或時板を折て宮より西に去る柳を以て事作の及ゆは  
て木の片端はまきし

よる時宮は依て前よりまきし柳を纏へ木の片端はまきし

小の更し柳を折て宮より西に去る柳を以て事作の及ゆは  
後度中へ通し一箇をまきし  
も纏へて通し

此宮の能度く建てる人集し又小の更し柳を纏へ木の片端はまきし

有と彼古きをまきし

之毎云其割葉跡葉の積るふい解くさるる若柳を仙  
聖妻い多く入るより牡丹芍薬葉の大白れと云ふ

一概より其時宮は依て風抄の名蹟のふ

ふ入る度より其時宮の跡をい

跡更し其後の子其のふ其牡丹の花一輪若みみか  
よまわしきまきし

此花の類より其時宮のふ其牡丹の花一輪若みみか  
のふ其牡丹一輪を折て入る数妻のこ

して面白く感考とて

利休の生堂の子相は牡丹をいへり

見人の又傲うて生堂は遠く人珠光の結核

不笑より事れを起して入利休の見人

朱光を法くして子相を入る生堂の草花

従のそ者同日二子相入る方利休の子相を

不笑は海軍の始なり

徹然の生の子相は牡丹を七八編入り

見人の利休をいへり

或人云生の子相は蓮をいへり善牡丹は結核とて

之ヲ

けり連し面白くして何れも生の子相といひ結

核は生堂よりとて生堂も生堂の子相といひ結核

従のそ者同日二子相入る方利休の子相を

教考も如く見人の又傲うて生堂は遠く人珠光

不笑より事れを起して入利休の見人

朱光を法くして子相を入る生堂の草花

従のそ者同日二子相入る方利休の子相を

教考も如く見人の又傲うて生堂は遠く人珠光

のそ者も如く見人の又傲うて生堂は遠く人珠光

利休少き龍全の隈を打つて御て御の花をいりて

こゝろふじかたつちさうゆも毎この春よりの

に隈を敷て堂の中へいりてさう火後のゆあて

れ

密入達雜の花を枯出さふふを以て密入しつゝま下にまらて  
魯のけりてり一汁をばと借ぬはつて人退出の言ふふ  
たふふけりてり列をてててて本の花よりのもて敷てててて  
て

かきつり一取てらわつてり

或人又言ふはあつてよとのてりてりてりてりてりてりてりてりてり

まなれ一枝をさして持ゆりけりてりてりてりてりてりてり  
一もあまのりまてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
りてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
てりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
入てりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
か

そほつてゆて親を言して見取のてりてりてりてりてり  
ちり利休尾を踏みてはあつてりてりてりてりてりてりてり  
ちり時をよよれ親を説き入るちり親は彼花をい  
娘のふをいりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

子夜あよほ紅糸の如くと号せし

美人の清らかなる枝をたぐひて拈指よ入花の表をさし  
まじやまじし

花入のまじやまじのてらに何し、まじやまじの短く志す  
たゞし

花とて秋八月は桂も仙もよめも十有月のま  
まじやまじとて面白し種花のまじやまじ

此糸皆後をよめてて明らし

此糸皆後をよめてて明らし

Handwritten notes and sketches at the bottom of the left page, including the characters "月入" and some illegible scribbles.



